



東奥日報社は地元企業・団体の協賛により、県内全ての17私立高校2、3年生のクラスに東奥日報を贈る企画「高校の教室に新聞を」に取り組んでいる。2017年夏に始まり、現在は2年生98クラス、3年生92クラスに毎日1部ずつ、東奥日報を届ける。学校側は教材として活用し、生徒たちは気軽に手に取って進路の検討や受験対策などに役立っている。3校の取り組みを紹介する。（久保信行、小泉結香）

# 手軽な教材 身につく力

## 高校の教室に新聞を

### 各校の取り組み紹介



記事を切り抜き、選んだ理由などをまとめる八戸学院光星高校の生徒

をほこるはずだ。

「輸出量最多」の記事を選んだ。「一面トップの大きな見出しと『最多』の言葉にひかれた。新聞には詳しくて面白い記事がたくさん載っていると気づいた」と話す。

生徒たちはこのほか、地元の陸奥産地区でのアート作品制作や、南部町に避難していたウクライナ人家族の記事などを短時間で切り抜いた。見出しと記事の1段落目で全体の内容が分かる。生徒たちは本紙の出版履歴や学んだ読み方を駆使し、大量の記事の中から「私の一本」を見つけ出していった。

生徒たちの変化を見続けてきた赤間俊勝教頭によると、切り抜きの授業前の休みの時間

## 切り抜き紹介し合う 八学光星

八戸市の八戸学院光星高校（中村良寛校長）は「時事探究」の授業に新聞を活用している。5～6月には生徒一人一人が印象に残った東奥日報の記事を探し、切り抜いて紹介し合った。記事の要旨や選んだ理由を自分の文章でまとめながら、読む力と書く力を高めるのが狙いだ。

普通科進学コース3年の生徒たちは6月上旬、数日分の本紙記事の切り抜きをした。「応援団、4年ぶりエール交換」の記事を選んだのは、このイベントに参加したチャリ



## 「将来の職業」へ生かす

▽普通科進学コース3年 松橋友結さん（17）茶道部長として、津軽藩4代藩主・信政の時代に遠州流の作法を取り入れたという記事に興味を湧かした。新聞をよく読み、学芸員とか歴史・文章に関わる仕事を目標にしたい。

「ディンケ部員の津島陽菜乃さん（17）。「見ている人も笑顔にできれば」と思いながら演技した。自分たちが頑張ってきたことが記事になり、学校のみんなにも伝われば」と顔を

から、新聞をめくっている生徒が出始めたという。赤間教頭は「もっと新聞に慣れ親しみ、読む習慣がつけば、今後さらに学業向上につながるのではないか」と期待している。